## Ｎｏ．５４７【２０２３年３月２４日配信】

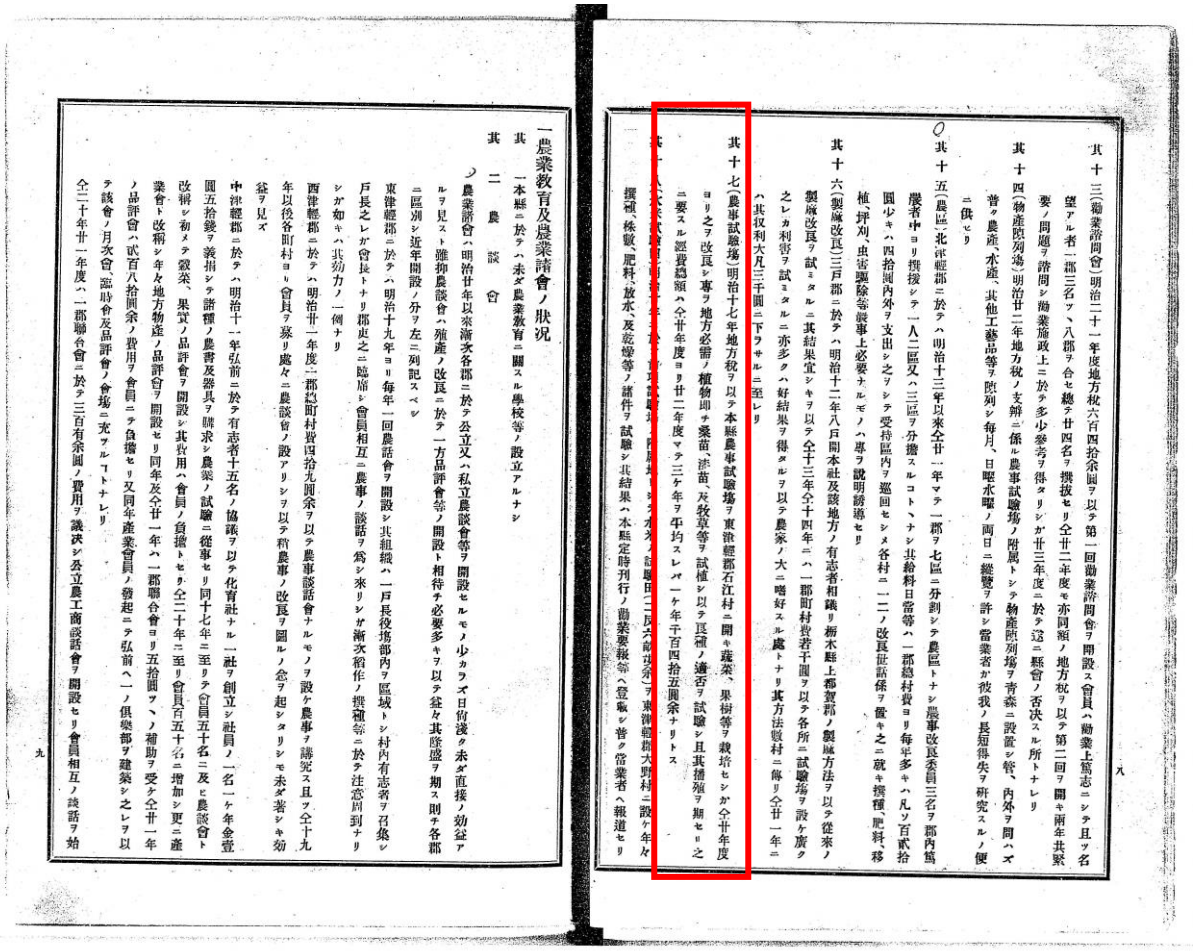
## 歴史に埋もれた農事試験場（担当：工藤大輔）

こんにちは！　室長の工藤です。

現在の農林総合研究所の前身に位置づけられる「青森県農事試験場」（以下、試験場と略記）は、明治 33 年（1900）3 月に誕生し、翌 4 月 1 日から業務を開始したと『青森県農業試験場百年史』（青森県農業試験場、2000 年）に記されています。また、『新青森市史』通史編第 3 巻近代では、明治 33 年 5 月に設置されたとあります。なお、同年 5 月 19 日付の『東奥日報』は業務の開始日を「去る 4 月 1 日」と報じています。設置場所はともに新城村大字石江です。

さらに、明治 33 年 7 月 4 日、第 2 回臨時県会で県の参事官が「農事試験場及び水産試験場は本年の創始になるもの」（『青森県議会史』）と発言しているので、試験場が明治 33 年春に業務を開始していることに疑う余地はありません。

しかし、明治 24 年に成った『青森県農事調査書』という記録には、同地に設置された試験場は明治 17 年の開業と記しているのです（下図囲み箇所）。さらに、明治 22 年 3 月 22 日付『東奥日報』には、試験場が行う馬の払下げに関する広告が載っているのです。明治 24 年 4 月 28 日付「官報」第 2345 号にも「青森県農事試験場附属物産陳列場」という試験場の附属施設が明治 22 年 10 月にオープンしたとあります。つまり、明治 17 年、少なくとも明治 20 年代前半に新城村大字石江の地に試験場（以下、第一次試験場とする）があったことは、これまた疑う余地がないのです。



『青森県農事調査書』（青森県　1891 年、国立国会図書館デジタルコレクション）

では、このふたつの農事試験場をどのように理解すればいいのでしょう…。

実は、第一次試験場は、後に青森県農会に無償で貸与され、経営が県の手から離れるのです。その時期は明治 27 年度からと見ています。ただ、かなり杜撰（ずさん）な経営であったようで、明治 32 年 10 月 21 日付『東奥日報』はここを訪れた「某事業者」の談話として、「同場は殆んと所有者なき荒畑の如き観」であって、「老木の桑・林檎等は半枯の有様」などと報じています。そうしたなか、この地に改めて県が運営する試験場（以下、第二次試験場とする）が設置されることになるのです。ですから、第一次試験場は、現在の農林総合研究所の沿革に絡まないのです。そのため、存在が歴史に埋もれてしまったのです。

一方、第二次試験場については、明治 20 年代後半から農業支援策としての法律が整備されたこと（とくに明治 32 年公布の農事試験場国庫補助法）や、明治 26 年に発足した国立農事試験場が成立の背景にあるようです。